

宝塚市自立支援協議会 専門部会「けんり・くらし部会（地域移行グループ）」
令和元年度活動結果報告

- I 開催日時 第1回 令和元年7月4日（木）出席者14名 13:30～15:30
第2回 令和元年12月11日（水）出席者16名 13:30～15:15
第3回 令和2年2月27日（木）出席者12名 13:30～14:30

II 要旨

第1回 けんり・くらし部会（地域移行Gr）（令和元年7月4日）

1. 新常任委員紹介
別紙資料参照

2. 平成30年度宝塚市自立支援協議会 全体会（平成31年3月22日）の報告
「平成30年度宝塚市自立支援協議会 専門部会活動結果報告書」を基に障害福祉課より報告を行った。

3. 昨年度の振り返りと今年度の取り組みについて

部会長）地域移行が進んでいない現状に対し、何とか進めていくことができないかという思いから立ち上がった部会である。地域移行に関する課題の検討や、身体障碍がの方から実際に地域移行した体験談を聞き取る等、地域移行のイメージ作りを繰り返し行ってきた。そして、実際に病院や施設に入院・入所しているどれだけの当事者や家族が地域移行したいと思っているかを把握するため、アンケート調査も行った。しかし、地域移行をしたいという声は2名しか挙がらなかった。特に精神科病院においては任意入院であれば退院できるはずなのに、どうして退院しないのかという疑問が挙がり、追跡調査も行った。

協議を進める中で、任意入院に対する病院の取り組みが不十分かもしれないという仮説が立ち、実際に病院に話を聞いてみることとなった。しかし、病院に話を聞く前に、受け皿となる地域の体制はどうなっているのか、という声も挙がったため、地域の受け皿としての状況を確認するとともに、福祉サービスである地域移行支援事業の制度について障害福祉課の職員より説明を受け、理解を深めた所で、活用状況や課題を確認してきた。その中で、他市で具体的に地域移行支援を展開している相談支援事業所の職員を部会に招き、地域移行の実践について話を聞いた。その振り返りを行う中で、ピアサポーター（以下ピア）とのつながりが大切であることを確認したが、実際に宝塚市ではピアは上手く活用されているのか、活用するためにはどうしたらいいのかを考える必要性が挙がってきた。そして、実際に病院と相談支援事業所との連携体制の現状という課題も確認され、顔の見える関係を築いていく必要性について認識した。

事務局）昨年度の取り組みから見えてきた課題と、それに対する取り組み案について別紙資料を基に説明。

部会長）昨年度のまとめと今年度の取り組みについて、委員の皆様から意見をいただきたい。

A委員）地域移行支援を考えていくにあたり、やはり一事業所では難しいと感じる。市内にもさまざまな施設・事業所がある。これらが連携していくことが大切だと考える。早急に基幹型相談支援センターを軸に市も考えていかななくてはならないのではないかな。

事務局）基幹相談支援センターが宝塚市に無い中で、無いからとただ待つだけでなく、実際にどのように動くのかと、相談支援事業所が手を取り合って取り組んでいく方法を考えたい。

A委員）市にも予算が無いと聞く。予算が無いなら知恵を持ち寄るしかない。それが協議会の役割でもあると思う。今のうちに何ができるのか、それを協議会で考えることもできるのではないかな。先日、箕面市の基幹相談を見学したが、箕面市には11の相談支援事業所と50のグループホームがある。市によるこの資源の違いは何で

あるのか考える必要があるだろう。それを考えるために自立支援協議会があるのではないか。

B委員) 2年前は地域医療G r (現:地域生活G r) の委員を務めていた。

久しぶりに部会に参加することとなり、精神のことがここまで取り上げられていると知り、とてもありがたく思っている。ただ、やはり予算が無ければ動きが取れないとも感じる。長期入院患者のことが取り上げられるが、長期の方だけでなく、短期間の方にも事業所やピアが訪問するなどできればと思う。息子が入院している病院に毎週会いに行っているが、相談支援事業所の職員を毎週見かける。病院の方とも懇意にされているのだろう。短期でもピアの方と関わることができればと思うが、子どもが入院している病院では、ピアの受け入れ態勢は病棟によって違うと言われた。

C委員) ピアは病院が受け入れてくれることが一番重要。ピアサポーター単独では病院に入れず、専門職と一緒になければならない等、病院ごとに決まりがある。また、それぞれの病院でその決まりごとや受け入れ態勢は違う。このルールをクリアして初めて病院に入ることができる。宝塚の場合、地域移行が進まない要因の一つとして、他市にしか精神科病院がないために地域移行に結び付けられないことも考えられる。何かをするときは先頭に立って動いてくれる人がいれば変わるだろう。

D委員) 他市であれば、どの事業所にピアがいると周知が図られている。西宮市であれば「輪っふる」、三田市は「あすなろ」、尼崎市は「あすなろ福祉会(ポルタ)」と、病院も施設も当事者も皆が知っている。当事業所に見学にこられる際も、三田であればあすなろの職員がピアと一緒に見学に来る。ただ、宝塚はどこにピアの方がいるのか、どんな活動をされているのか分からない。まずは知っていくことから始まるのではないか。

事務局) ピアについて、5月末に自立生活支援センターに行って話を伺ってきた。宝塚市では自立生活支援センターが市の委託を受けてピアサポーター活動を行っている。登録しているピアサポーターは複数おり、高次脳機能障害、脳性まひなどの当事者から、その保護者・家族の方まで様々であった。ピアカウンセリングや、居場所や交流が目的のサロンなどの実施、外部研修にて講演も行っている。地域移行の活動として、ピアからも何か取り組んでいきたい、病院に行きたいとの声は挙がるが、一機関からの声掛けだけでは病院に入っていくことができないという門戸の狭さが話に挙がった。宝塚に関しては、自立生活支援センターがピアサポーター活動の中心となっているが、これからの活動の展開についてはピアの方たちと話をしながら、どのような活動ができるかを考えている、とのことであった。

B委員) 家族会では、月に1回食事会「ほっこり会」を行っている。2年程続いており、メンバーや元メンバー等、みんなで一緒に食事を取りながらほっこりしてもらおうという意図の集まりである。その場にはピアサポーターも参加している。

部会長) 私自身もピアサポーターのことは詳しくないが、どんな時にピアサポーターに来てもらえるのか。成年後見で関わっている方でピアサポーターの方に自宅まで来てもらって話をしてもらうことは可能なのだろうか。ピアの方が入れるのは病院だけなのか、それとも在宅の場も可能なのか。ピアサポーターになるためにはどのようにすればいいのか。他の地域であればピアサポーターといえどここ、という機関があるのに、宝塚ではそのような場所がないのはなぜなのか。色々な疑問がある。やはりピアのことを知っていくということも大切かもしれない。自立生活支援センターや他の所でも構わないので話を聞いてみてもよいと思う。

A委員) どの機関とも、誰ともつながっていない人が一番に相談する場所や情報を得る場所はどこになるのか。やはり障害福祉課か。

障害福祉課) 市の福祉計画を作成する際のアンケートにて、主な相談先はどこかという質問項目を設けた。平均して多いのは障害福祉課である。ただ、^{がい}障害種別により差はある。精神の人だと、「相談先がない」と答えた方が12.7%と多い傾向にある。精神の当事者の方は相談先がないと感じていることがここからも見て取れる。

B委員) 昔は、精神の人は相談先として保健所を挙げる方が多かったが、今はそうではない。最近は保健所を思

いつかない人が増えた。以前と比して保健所が離れたイメージもあり、寂しさを感じる。

E委員) 障害福祉課の窓口で手帳や自立支援医療の手続きをする際、それ以外のことについても相談する人も多い。生活や福祉の相談となれば、相談支援事業所につながるようにしている。保健所は保健というイメージ。家族会のことも伝えるが、病院でケースワーカー(以下ワーカー)がいる所であればそこから相談につながっていくこともあるが、宝塚市内にはワーカーがいる病院が少ない。医師だけであれば生活面までの相談となると難しくなる。精神科の診療所にワーカーがいて欲しいと個人的には思う。

D委員) 昔は保健所でデイケアを行っていた。保健所の窓口としても開かれていてつながりやすかったのではないかな。西宮市や尼崎市は行政手続きの違いがあり、保健所への繋がりやすさなどの差があるのではないかな。

F委員) 以前は主な相談先が保健所だった。今は相談窓口が増えたために却って分かりにくくなったということもあるかもしれない。

部会長) 「どこに相談していいかわからない」ということについて掘り下げたい。本当にどこに相談していいのかわからなかったのか、相談はしたがつながらなかったのかで、意味合いが違ってくる。どこに相談していいのかわからないのであれば、正しい案内をすればいい。上手くつながらなかった、対応してもらえなかったということであれば大変だろう。いずれにしても、元から出ているピアサポーターの話はしていきたいと思うが、皆様の意見としてはどうか。共通認識を一つ持つことも大切だと感じるが。宝塚の現状も含めて知ることができれば。

D委員) 何かにつけて助成がいるのではと考える。誰かが先頭に立って動いていくにしても、誰かが動いていかなければ始まらない現状が今まで続いていた。皆でやっというやり方が宝塚に合っていると思う。情報を仕入れつつ、全員で進めていくことができればと思う。

事務局) 先日保健所と話をする中で、どうすればうまく病院と繋がって話ができるか、皆で考えて進めていくことができれば、実践者レベルで話ができれば、という話になった。

F委員) 相談支援事業所がどれほど地域移行のことを知っているかも人によって様々だろう。計画相談としては精神科病院に入っていると思うが、地域移行となればどのように進めていけばいいのかわからないというところもある。理解できれば取り組んでいきたいと考えている事業所もあるのかもしれない。今後、健康福祉事務所では、相談支援事業所の職員と共に理解を深める機会が持てないかと考えている。詳細は具体化していないが、一度場を設ける予定はある。

部会長) 市民福祉金廃止に伴う基金の活用の話もあり、市が委託する相談支援事業所が増えたが、特定の所だけではなく、みんなで取り組もうというイメージが持てればと思う。相談支援事業所と病院の取り組みとして考えていく中で、協議会としてどこまでのことができるだろうかと考える。

D委員) 協議会の地域移行グループで実践・実務として取り組むことは難しい。地域移行グループの派生としてF委員の言っていた集まりが最初の突破口になると思う。この集まりの会が何かを具体的に動かしていくグループになれば、実践レベルで動いていくのではないかな。その立ち上がりの最初の部分を保健所が担い、その動きをサポートしていくのが協議会であり地域移行グループではないかな。自立支援協議会の名で病院に働きかけるのは難しいと感じる。

A委員) 共通認識を持って一緒に集まって行くのが最初になる。

D委員) 集まったグループとこの協議会が協力体制をとることや、そのグループで出た課題をまた地域移行Grに持ち寄り、そして解決に持っていく手段を協議し、そして結果を市に吸い上げてもらうという流れができることが望ましい。

A 委員) 話し合いをするばかりで終わるのではなく、困りごとを考えていくのが協議会だろう。

部会長) 実際にピアの方が入院患者に会いに行く段取りはどのようになっているのか。患者側が来てほしいと言えば行くことが可能なのか。

C 委員) あすなろでは、精神科病院で行っている作業療法(以下 OT)の前に訪問している。クッキーを持参し、病院で飲み物を用意してもらい、4つくらいのグループに分かれる。ピアから自己紹介をして始まり、「何か困ったことはないか」等と話しかける。「来月退院です」、「先月入院した」というような話をしながら過ごす。4~5人のピアサポーターと支援者、介護福祉士と一緒に安定した患者さんと話をさせてもらっている。とても喜んでもらっていて、看護師からも「この人はこんなに話ができる人なのか」などといつもと違う一面が見ることができ、感謝されることもしばしばである。

部会長) どのような形で会うかは病院ごとに違うのか。

C 委員) そのとおり。病院によって異なる。

部会長) 今の一例は OT の前に、OT に参加するために来ている人と会う。呼ばれたから行く、個人的に行くというわけではない。

C 委員) 「この日にあすなろが来るから参加したい人」と参加を募ってもらっている。そのため事前に人数の把握はできている。

B 委員) OT プログラムの一つとして参加するのか。

C 委員) 病院がそこまで考えてくれているかはわからないが、1時間ほど時間はもらっている。

D 委員) おそらく、あすなろも輪っふると同じで、具体的なケースがなくても病棟に入ることのできる許可を病院に得ている。その後 OT プログラムを使ってこのようなプログラムができないかと交渉し、そのような形になっているのではないかと。話の持っていく方は輪っふると同じ。宝塚で同じような取り組みを行うとなった時、どこか特定の相談支援事業所で行う、という話には恐らくならないため、グループを作って病院に提案する。実務で動く段階になったら、マンパワー不足はどこにでもあるため、自立生活支援センターのピアの方や、宝塚市内の相談支援事業所が協力して当番制や持ち寄りで行うことは可能ではないか。このような下準備を行い、ピアサポーターや相談支援員が病棟内に入っていき、「この人とだったら退院に向けて動いてみようか」と思える患者が増えていき、やっと地域移行の実績が増えていくのではないかと。

E 委員) ピアサポーターが動く時、個々人のケースとして地域移行支援事業として動くものと、団体として関わりを持ち入っていくものと大きく分けることができると思う。団体として入っていくという下地があった方が、地域移行支援事業につながりやすいと感じる。

D 委員) 私のように地域の福祉サービス事業所としては病院に入りやすいが、宝塚市の委託を受けた相談支援事業所としては入りにくいところもあると思う。市にそのような動きを認めてもらえれば、出来ることも増えてくるのではないだろうか。

事務局) ピアサポーター事業の話聞きに行った時にも今後は色々と考えながら動いていきたいと話があった。どのように今後連携していくのかという話し合いは必要になると感じている。

部会長) 入院している人は、宝塚市民とその他の自治体で分かれているわけではない。分け隔てなく取り組める

に越したことはないが、自立支援協議会として市の活用として考えていくこととなる。ピアサポーターについて学びつつ、仕組みづくりについても情報を確認し、部会と共有しながら取り組むことができればと考える。今年度はピアサポーターについて学びつつ、仕組みづくりのグループの動きを確認しながら進めていくこととする。今年度で何かを提案するところまで話を進めていくことができればと思うが、次年度以降となってもよいと考える。

事務局) ピアサポーターの実践について、今後は伊丹市の ICCC 等に話を聞きたいと考えている。次回の部会までに他市の状況を確認し、その報告を行いたい。また、以前の輪っふるの時のように実践を聞かせていただく場を持つこともよいかと考えている。

4. 精神科病院見学会の報告

事務局より報告

4月25日に実施。午前・午後の2部制で、それぞれ1時間半実施した。市内の相談支援事業所3か所から計6名が参加した。

見学会の目的は3つ。①精神科病院に入院されている方が、どのような場所でどのように過ごしているのかを知る。②病棟職員との顔つなぎの機会を作り、今後、地域と病院が連携し退院支援や地域移行支援等を円滑に行えるようなきっかけを作る。③病院での過ごし方等を知ること、長期にわたり入院している方が、退院して地域での生活に戻るために、どのような支援が必要となるのか見識や、ご本人の気持ちに寄り添った支援につながるような研修の機会とする。

見学会は1部2部ともに同一の内容である。病院の概要や変遷等を聞き、その後病棟内の見学を行った。病棟内を包み隠さず見学させていただくことができ、古くからある東病棟も見せていただいた。大部屋に大勢の方が入院されている姿は、2~3年前からようやくプライバシーや人権に対する配慮がなされてきたと言えど、決して行き届いているとは言えない現状を目の当たりにした。見学を終えた相談支援員からの感想の中にも、「衝撃を受けた」「ショッキングだった」というものもあった。隔離室で何日も過ごす、入院して何十年と過ごすということを考えた場合、「もし自分がその立場であったら」と立ち返って考えるきっかけにもなったと感じる。

相談員は今までも退院支援においては病院に行っており、待合室や面談室には入っていた。今回病棟内に入ったことで、治療の場であるため仕方がない面もあるが、監視カメラがある、カーテンはあるが開け放たれている等、普段の病院の姿を見ることとなり、「何と言えればいいのか分からない」、という声も感想として挙がっていた。本来病院は治療を行い、快復すれば退院するところである。退院への働きかけや声の挙がる仕組みづくりの必要性を改めて認識することとなった。現在の相談支援業務の中では、退院支援の中でAさんという個人に会うことができても、その他大勢の方には会うことができない。働きかけができる仕組み、病院に入っていくことのできる仕組みを作っていくことで、退院することができる、当たり前前に地域で暮らしていける環境を整えていくことができる、この仕組みづくりの必要性を感じてもらえたのではないかと思います。実際、見学会終了後に何かできることがあるなら協力したいという声も挙がった。

見学会を開催し、病院からも良い機会となった、また開催出来ればとの声も挙がっていると聞いている。今回は病院がどのような所であるのかを相談員が見学に伺ったが、病院側からもどういう場所で相談支援が行われているのか見てみたいという声も挙がっていたと聞いている。

質疑

A 委員) 参加は3事業所のみだったのか。

⇒急なケース対応等があり、当初予定していた2事業所が参加できなかった。

D 委員) 相談支援事業所だけに参加を限定した理由はあるのか。

⇒地域移行を進めていくにあたり、実際に携わる相談支援事業所の意識づくりをしたかったため。また、実際に入院されている様子を目の当たりにすることで感じられることが多くあると思ったため。

B 委員) 子どもの転院の時に5か所ほどの病院に行ったが、病院は個々に特色がある。一長一短と言ってしまうばそれまでだが、本当に様々である。

⇒包み隠さず見てほしいという思いが病院側にもあり、今回はそれを実現できた。病院側も相談支援事業所と関係を作っていきたいと言っていた。

B 委員) 以前関わった病院のPSW(相談員)の方は対応が最高に良かった。「どんなことでもお受けしますよ」

と、ぼろぼろになった心を支えてもらった。

G 委員) 見学会の件とは異なってしまいが、最近関わった話として、精神の当事者で認知症の入っている人がいる。犬を飼っているが、リードを外しているためにその犬が逃げ出してしまふ。その犬を迎えに一緒に警察に何度も行った。通学路にもなっているため、犬が子どもに噛みつかないよう見守りもしてきた。地域移行の考えでは「地域で見守っていきましょう」とあるが、地域住民として、どこまでできるのかと感じる。地域包括支援センターや障害福祉課にも相談した。保健所や警察にもたびたび来てもらっている。事業所は多くあるが、市から委託を受けているところは更に事業を広げていくことや市と連携して動いていくことができるのではないかと思う。ピアサポーターの活用促進等、更に活発にできるのではないか。高齢の分野であれば地域包括支援センター7か所が市から委託を受けている。地域で何か困ったことがあれば地域包括支援センターに連絡をする。地域でも「見守りとはなにか」と思案しつつ苦勞している。民生委員として地域の目に見えないような活動もしている。

D 委員) 私は仕事として施設に迎え入れている。地域で問題を起こして入院しても、退院して地域に戻ってくる、地域の人からするとまた負担になり得ることが起こる可能性はある。そこは自分たちも考えなければならぬ部分であると改めて感じた。

5. その他

事務局より

今年度のスケジュール

地域移行の実践に向けた動きについては、次回の部会までに事務局が主となり情報収集を行う。委員からの話にもあった集まりを9月頃に開催予定。これらの報告を第2回の部会(12月予定)で行う予定とする。来年2月ごろに第3回の部会を考えるが、委員からの意見を吸い上げ、開催時期や回数も検討していくこととする。

障害福祉課より

1回目の定例会が10月8日、全体会が11月5日に開催予定となっている。

宝塚市における地域生活支援拠点について現在市と委託相談支援事業所で検討を行っており、11月の全体会で大枠の構想を発表する予定である。

Ⅲ. 今後の展開

精神科病院からの地域移行に関わる議論を重ねる中で、「なぜ宝塚市において地域移行支援事業が活用されないのか」という課題が浮かび上がり、近年はその理由を糺すための協議を重ねてきた。

今年度は、昨年度の協議でまとめた3つの課題に対する取り組み案(別紙参照)について、相談支援事業所が核となって取り組みを開始した。病院との連携及び働きかけや、近隣市での地域移行の取り組み、ピアサポーターとの協働等をテーマに、実践についての聞き取りや病院への見学を行っている。これらの取り組みを部会内で共有し、今後の方向性の確認や、新たな課題が生じた際には委員に諮りながら取り組みを継続していきたいと考えている。また、昨年度から継続するキーワードである「ピアサポーター」についても、部会内において実践の話を伺うべく、調整を行う予定である。

昨年度の取り組みまとめ

◎昨年度の協議を通じ、宝塚市における地域移行支援事業の推進に関する課題の整理と今後の取り組み案について下記のようにまとめた。

課題①

部会で取り組んだアンケート(平成 27 年)より、長期に入院している方から退院希望に向けての声が上がらない現状があること。また、地域移行支援事業という制度があっても、本人が申請をしなければ利用できず、制度の周知が十分でないことも考えられる。

また、長期入院患者の退院意欲向上を図る為には、病院内外からの刺激が必要であり、病院も外部からの働きかけを求めている一方、支援機関単体で病院への働きかけを行うには限界があり、相談支援事業所や、市を含めた行政機関や地域の受け皿となる支援機関との連携が重要となる。

課題①に対する取り組み案

病院との連携を取りやすくするための仕組みの構築が必要と考えられる。実際に支援にあたる支援機関や行政等が、どのような役割を担っていけるのかを協議する必要がある、部会という大きな集まりではなく、実践者レベルの話し合いの場で整理を行う。

課題②

地域移行支援事業の実施主体でもある相談支援事業所と精神科病院との関係性の希薄さがあるのではないか。長期にならない退院支援についての相談はあるが、長期に入院している方の地域移行に関しての相談は少ない現状がある。

課題②に対する取り組み案

病院と相談支援事業所との関係性を強める取り組みも必要である。

まずは、市内特定相談支援事業所を対象とした精神科病院見学会の開催を企画し、近隣の精神科病院から、関係づくりの取り組みを進めていく。

また、相談支援事業所間の連携強化も図り、地域移行支援を実践する側の意識強化も目指す。

課題③

地域移行支援を進めていくにあたり、ピアサポーターの存在は大きく、ピアサポーターだからこそできる関わり(入院患者への刺激、共感、地域生活への意欲の向上等)がある。しかし、宝塚市におけるピアサポーターの活動状況については分からない部分が多くあるとの意見が聞かれる。

課題③に対する取り組み案

宝塚市のピアサポーターの活動状況について知る必要がある。

宝塚市におけるピアサポーターの現状確認及び今後の連携の可能性について確認する。

第2回 けんり・くらし部会（地域移行G r）（令和元年12月11日）

1. 全体会（令和元年11月5日）の報告（障害福祉課より）

2. けんり・くらし部会 地域移行グループの協議を経て、相談支援事業所の取り組み報告

事務局より、昨年度に整理した課題を改めて確認し、資料をもとに取り組みについて報告を行った。

委員より質疑・感想

- ・精神科病院交流会について、参加した患者はどのようにして集まったのか。
⇒事務局：病棟内に開催日時を記載したポスターが掲示されていた。
精神科病院：興味のある人に分け隔てなく来てもらった。
- ・交流会に参加していたピアサポーターの年齢層はどのようになっているか。
⇒30～50代くらい。幅広い年齢層となっていた。
- ・施設も外部から人が来ると、落ち着かなくなる人もいる。一方でそれを嬉しいと感じるという声も聞く。知的障碍^{がい}の施設も同様で、人と接することで不調になる人もいるものの、そのような関わりは必要だと感じる。施設であると、職員等いつも見る顔ぶれが決まっている。そのため、外部から人が来ると活発な表情を見せているように感じる。
- ・精神科病院交流会では、SSTで言葉のキャッチボールをしたとあるが、これもピアサポーターが主体となって行っていたのか。
⇒精神科病院：ピアサポーターが主体となっている。練習を行い、研修にも参加していると聞く。
交流会ではピアサポーターが困っている時に職員がサポートしている。
- ・A委員もピアサポーターとして活動されているが、報告にあった交流会と同じような活動をされているのか。
⇒A委員：自身が活動している病院では「〇月〇日にピアサポーターが来ます」という張り紙を掲示してもらっている。当日は30分程病院のスタッフと打ち合わせを行う。この時にはどのような人が参加するのか分かっているので、「今日は静かな雰囲気」、「今日は賑やか」、と交流会のイメージも把握できる。交流会にはいつもお茶とクッキーを持っていき、自己紹介やグループワークを行う。グループワークでは、自身の体験を伝えたり、「このような時にはどうしているか」といった質問を受ける等、和気あいあいとした雰囲気となっている。
- ・他市の相談支援事業所との交流会において、事業所間の共通点や相違点は見えたか。
⇒「まずは会いに行く」という考え方は同じ。病院に会いに行くための鍵として保健所が挙がっていたことも同じ。会の進め方についてはそれぞれの方法があるが、病院と一緒に進めていきたい、病院と事業所がお互いに得をする関係でありたいという思いは共通していた。
- ・精神科病院の交流会に参加した中に、「自立したい」という思いから参加した人はいたのか。
⇒まずは出会いの場、入院している方からの声を聞く場であったため、「自立したい」の思いを持った方の参加があったのかは不明である。ただ、地域から会いに行くということが、入院している方への刺激となり、「退院したい」と地域に目が向くきっかけになればよいとの思いを感じた。
- ・ピアサポーターが病院に行き、外からの風を入れることはとても大切だろう。ただ、実際に地域移行が進んでいない現実もある。それは24時間対応をはじめ地域の受け皿がないことに原因があるのではないか。本人が退院したいと思った時に、家族が本人のすべてを担うことは負担であり不安もある。そのためには、やはり福祉と医療が受け皿を整えていく必要がある。

⇒交流会の中で「地域にも相談を受けてくれる人がいる」と伝えていくことも大切であると感じている。今は入院しても相談支援事業所と繋がっている人もいるが、長期入院している人は支援者との接点がないことも考えられる。まずは、地域の支援者と入院している人が出会っていくことを大切にしたい。

- ・以前のアンケート調査からも見えてきた「声が挙がらない」ことが問題だということに対しての打開策がこの取り組みであると思う。外部からの刺激や出会い、ピアサポーターの活動は大切だろう。不安な時や声を挙げようと思った時、相談支援事業所が病院に何度も訪問する中で繋がっていくものと感じる。

- ・地域移行支援事業は期間が6か月と聞いたが、短いのではないか。

⇒声を聞く仕組みを整え、退院したいと思うまでの関わりについて期間は限られていない。退院したいと思った時に、そこを起点として地域移行支援事業の利用が始まる形となる。必要に応じて延長は可能であるが、退院したいという声を出すことのできる仕組みはやはり重要だろう。

3. その他

部会長より

今後の地域移行グループの展開については2月開催の部会で報告する予定である。

現段階で展望は固まっていないが、事務局及び三役の間で意見交換を行い、今後の方向性について検討していきたい。

III. 今後の展開

これまでの地域移行グループの協議によって導き出された「宝塚市で障害福祉サービスである地域移行支援事業の活用が進まない現状の課題」については、相談支援事業所の取り組みとして実践に移すこととする。

次年度以降の協議テーマは、地域移行を考えるにあたっての原則となる「地域で暮らしたいという本人の願いは叶えられるべき」という考えを委員間で共有し、この考えに対して意見提起を求め、その結果をもって今後の検討材料としていく。

1. はじめに

平成30年度のけんり・くらし部会（地域移行G r）での協議にて、宝塚市における地域移行推進に関する課題の整理と今後の取り組みの方向性をまとめた。

① 部会で取り組んだアンケート（平成18年）から、長期に入院している方から退院希望に向けての声が上がらない現状があること、地域移行支援等の制度があっても、本人が申請をしなければ利用できず、制度の周知が十分でないことが課題として考えられる。

長期入院患者の退院意欲向上を図る為には病院内外からの刺激が必要であるが、一つの支援機関独自で病院への働きかけを行うには限界があり、市を含めた行政機関や地域の受け皿となる支援機関との連携が重要となる。

→市や保健所等行政も巻き込み、病院との連携を取りやすくする仕組みの構築も必要であると考えられる。行政に対してどのような役割を求めるのか協議する必要がある。部会という大きな集まりではなく、実践者レベルでの話し合いの場を持ち、行政機関に求める役割の整理を行う。

② 地域移行支援事業の実施主体でもある相談支援事業所と精神科病院との関係性が希薄なのではないか。長期にならない退院支援についての相談はあるが、長期に入院している方の地域移行に関しての相談は少ない現状である。

→病院と相談支援事業所との関係性を強める取り組みも必要である。

まずは市内特定相談支援事業所を対象とした精神科病院見学会を企画し、近隣の病院から関係づくりを進めていく。

また、相談支援事業所間の連携強化も図り、地域移行支援を実践する側の意識強化を目指す。

③ 地域移行支援を進めるにあたって、ピアサポーターの存在は大きく、ピアサポーターであるからこそ可能な関わり方（入院患者への刺激、共感、地域生活への意欲の向上等）がある。しかし、宝塚市におけるピアサポーターの活動状況については不明確な部分が多いとの意見を聞く。

→宝塚市のピアサポーターの活動状況を把握する必要がある。

宝塚市におけるピアサポーターの現状確認及び、今後の連携の可能性について確認する。

これらの課題に対して、今年度は現状を知ることが第一の目的とし、②③について取り組んだ。

2. 取り組み報告

○精神科病院見学会

日時：令和元年4月25日（木） 午前・午後の2部制

参加者：市内3か所の相談支援事業所から6名

目的：①精神科病院に入院している人がどのような場所でどう過ごしているのかを知る。

②病棟職員との顔つなぎの機会を作り、今後地域と病院が連携して退院支援や地域移行支援事業等の活用を円滑に行えるきっかけを作る。

③病院での過ごし方等を知ること、長期にわたり入院している人が、退院して地域での生活に戻るため、どのような支援が必要になるのかの見識や本人の気持ちに寄り添った支援につながるような研修の機会とする。

- ・①について、普段立ち入る機会のない病棟内を、病院相談員からの説明を受けながら見学することで、病院での暮らしや生活環境等、様々なことを実際に見聞きすることができた。参加者からは、「ショックだった」「やはり病院はずっと暮らす場所ではない」等の声も聞かれ、「声が挙がらないからこのままでいい」ではなく、何らかの取り組みが必要であるとの認識を持つきっかけとなった。
- ・②について、受け入れた病院側も、「実際に地域で相談支援に関わる相談支援事業所の相談員と顔つなぎができ、よい機会になった」、「何かあった時に連絡が取りやすくなった」と話していた。相談支援事業所としても、「実際に病院の様子を知ったことで、具体的にイメージしながら話を聞くことができ、連絡も取りやすくなる」といった声が聞かれた。
- ・③について、「退院したいという声が挙がらないからこのままでいい」ではなく、やはり退院して地域で暮らすことの必要性、退院したいと思えること、声を上げることのできる仕組みの必要性を参加者に感じてもらうことができた。

○宝塚市のピアサポーターについて聞き取り

日時：令和元年5月30日（木）

目的：実際に宝塚市ではどのようにピアサポーターの活動が行われているのか把握する。

- ・宝塚市社会福祉協議会 自立生活支援センターの職員2名より、現在行っているピア・サポート事業について説明を受けた。宝塚市では自立生活支援センターが市の委託を受けてピアサポーター活動を行っている。登録されているピアサポーターは高次脳機能障害^が・脳性麻痺^が・精神障害^がの当事者やその家族等複数名である。
- ・事業内容は①ピア・カウンセリングの実施（傾聴・受容）②ピア・サロンの実施と活動支援（居場所・交流）③ピア・サポート活動（地域移行・地域定着支援・福祉学習）④その他障害福祉^がにかかわる支援（自治会やまちづくり協議会等での啓発活動）
昨年度の実績として、「ピア・カウンセリング」年5回、「ピア・サロン」年5回、「ピア・サポート活動」として福祉学習を年3回開催した。
- ・今後どのようにピア・サポート事業を展開していけばよいのか、ピアサポーターと共に検討を重ねているそうである。特に地域移行に関しては病院や施設に訪問を行いたいとピアサポーターから声が挙がるも、一機関からの声掛けだけではなかなか病院に入っていくことができないという門戸の狭さが課題となっている。

○特定非営利活動法人 ICCC の取り組みについて聞き取り

日時：令和元年8月29日（木）

目的：地域移行支援事業の展開や、「声の上がる仕組みづくり」を考えるにあたり、精神科病院で病棟プログラムに取り組む「特定非営利活動法人 ICCC」（伊丹市）より聞き取りを行う。

- ・震災復興事業として「小規模作業所どりー夢」がスタートし、活動する中で、「自分のことを語る」、「その話を聞いて喜んでくれる人がいる」、「喜んでくれる人の姿を見て嬉しいと感じる」、この流れの中から『語り部』が生まれ、ピアサポーターが自然発生していった。「自分だけではない、同じような人がいるのだ」という気付き、喜びはとても意味のある大きなものであり、現在もこの『語り部』の活動が行われている。病状が安定しており、自身が病気を克服した体験を共有することで、同じ病気を持つ方の力になりたいという思いを持った12名がピアサポーターとして活動している。

- ・精神科病院での病棟交流会について、目的・思いは「地域移行につながるための活動」としている。参加者は入院形態や居住地で限定しておらず、「参加できる人は集まってください」というスタンスとなっている。病棟に開催日が掲示されており、それを見ての参加や、看護師に促されてくる方等様々である。交流会に参加してもすぐ帰ってしまう人もいるが、企画側としては「来てくれるだけでいい」という思いがあり、「外から人が来ることにより何らかの刺激がある」ことが大切であると考えている。
- ・交流会のプログラムについては、病院の担当相談員と事前打ち合わせを1度行うが、基本的にICCCから年間スケジュールを病院側に提示して進めていく。この病棟交流会を通して地域移行につながればよいと思うが、実際に地域移行支援事業につながったケースは今のところ無い。病院との連携も模索するが、難しさも感じている。
- ・伊丹市自立支援協議会で「精神障害者地域生活検討会」を行っており、その中では保健師との関わりがあるため、保健所の協力を得やすい。病院へのアプローチは保健所が間に入ることでスムーズに行うことができる。
- ・ICCCのピアサポーターは本人の気持ちを一番に考えており、入院歴の有無は登録の要件としていない。病状やその時々状態を職員で見極めてピアサポーター活動の調整をしているものの、本人の自発性を最も大切にしている。
- ・専門職だけで訪問した際は「また質問されている」「またこの事を聞かれるのか」と受け止められてしまいがちだが、ピアサポーターがいることで空気が和んだり、話を聞きやすくなる場面が多くある。
- ・訪問に際して、ピアサポーターと事前打ち合わせや振り返りも行うが、一緒に行くからと特別な配慮があるとは感じていない。思ったことは話し、確認することが大切であると感じている。そのため、月1回のピアサポーターミーティングへの参加は必須としている。
- ・ピアサポーターミーティングでは、実際の活動の振り返りや疑問、思い等を活発に議論しあう。
- ・ピアサポーターが単独で動くことはなく、必ず専門職が同行しており、ピアサポーターミーティングの場もあるため、実際の支援の場で専門職が困るという事柄は今までもなかった。

○ICCCによる精神科病棟交流会の見学

日時：令和元年9月19日（木）

目的：意欲喚起、外とのつながりを大切にした「地域移行につながるための活動」の実践の場を見学する。

- ・ICCCよりピアサポーター4名と職員2名が出席した。病院側からは女性患者1名、男性患者9名の計10名が参加。
- ・交流会には患者だけでなく看護師や病院相談員の姿があり、それぞれ患者の様子を見守っていた。
- ・13：30から15：00までの時間設定で、①ピアサポーターの自己紹介、②声を出すための歌、③ピアサポーター4名の1日の過ごし方の発表と質疑、④SSTにて会話のキャッチボール、⑤小グループに分かれてのグループワークという流れで進行した。
- ・ピアサポーターの主導で進行しており、時折職員がフォローを行っていた。
- ・グループワークで小グループとなった際、病棟で普段ほとんど話をする事のない人が口を開き、交流会終了後に看護師から「この人が話したのか」と驚いた様子を見せる場面もあった。

○輪っふるによる精神科病院病棟交流会の見学

日時：令和元年11月12日（火）

目的：実践の場を見学する。病院との連携の在り方等を知る機会とする。

- ・「障害者相談支援センター輪っふる」（西宮市）より、職員2名とピアサポーター1名が出席した。病院からは18名の患者が参加した。
- ・交流会の前に、病棟デイスペースにて、好きな飲み物を飲んだり、好きな雑誌を見て過ごすという参加自由な病棟内OT(作業療法)プログラムがあり、輪っふるのスタッフはこのプログラムから参加し、患者に声をかけたり雑談をする中で、自然と顔見知りとなり関係性が育まれていた。
- ・14：30～15：00が交流会の時間である。テーマは事前に病院職員と相談の上設定されており、今回のテーマは「お金」。ピアサポーターのお金にまつわる失敗談や立ち直りのストーリーを実体験として報告した。患者にとっても身近な「お金」というテーマであることもあってか、様々な声が挙がっていた。輪っふる職員や病院職員からは、患者が希望すれば病院の相談員や地域の相談支援事業所でも、お金の相談に応じることができる伝えていた。
- ・輪っふるの職員が準備している間には、病棟の看護師長が前に出て参加者とやり取りし、場を温めていた。一方、プログラムの司会進行は輪っふるの職員が行っていたが、質疑の時には再度看護師長が間に入るなど、それぞれの役割を担いながら進行していた。
- ・プログラムの最後には、ピアサポーターが作成したアンケートによる意見集約が行われていた。
- ・毎月第2火曜日の交流会は、病棟にいる全ての患者が参加対象となる。病棟プログラムの流れでその場にとどまる人や、職員の声掛けで参加される人等様々であるとのことであった。
- ・毎月第3火曜日には「輪っふるたいむ」という5名程度の少人数に絞られたプログラムを設定している。テーマに沿った話をしたり、外出したり、「仲間と一緒に」というコンセプトを大切にされたプログラムになっているとのこと。
- ・輪っふるの病院での取り組みにおいて、参加者を大集団・小集団に分けるが、それぞれに目的があった。また、交流会後には輪っふるの職員、病棟の看護師長及びOT職員が参加して振り返りが行われ、次回プログラムについての意見交換も行われていた。
- ・病院職員が地域との連携プログラムで一番に考えていることは「何の情報をどの患者に届けたいか」
- ・輪っふる職員のプログラムについての思いは「手の込んだプログラムを組むことが良いわけではなく、まずは病院で長期在院の患者と出会うことが大切」ということであった。
- ・ピアサポーターからは「患者の中にはこれまでの生活歴もあり、自分よりも知識を持っている人もいる。そのことも意識して話をするが、難しさを感じることもある」という声も聞いた。

3. まとめ

今年度の取り組みを行う中で、改めて精神科病院に長期入院している人が「地域に戻って生活したい」と思える「きっかけ作り」、そして「声を挙げてもらうための働きかけ」、さらには「挙げられた声を聴くための仕組みづくり」の必要性を感じた。

宝塚市の中でこのような仕組みを作っていくためには、市行政並びに、健康福祉事務所、市内各相談支援事業所との間で共通認識を持ち、協力し合うことが必要であると考えます。

今後は、地域移行に携わる支援者が集まり、こうした課題の共有を図りながら、どのように取り組み、働きかけていくことが可能なのかを協議し、実践に繋げていきたい。

第3回 けんり・くらし部会（地域移行Gr）（令和2年2月27日）

1. 今年度のまとめ

事務局) 例年5、6回部会を開催していたが、今年度は3回開催した。昨年度に地域移行支援事業の推進における宝塚市の課題をまとめ、その課題に沿った実践の取り組みについて第1回、2回の部会で報告を行った。取り組みの内容としては、宝塚市におけるピアサポーターの現状や、他市(伊丹市、西宮市)のピアサポーター活動に関する聞き取り、実践の場面の見学等である。

2. 次年度の部会について

事務局) 本年度は宝塚市においての地域移行支援事業推進のため、部会で挙げられた課題を基に、市内外問わず地域移行に取り組んでいる機関への聞き取りや、他市での実践見学等に取り組んだ。この取り組みを通し、関係性を深めることができた西宮市の輪っふるより、「現在、輪っふるが実施しているA病院での取り組みを一緒にできないか、A病院も是非と言っている」と声をかけられている。実際にどのような取り組みができるのか現時点では不明瞭ではあるが、来年度にA病院での取り組みを見学し、病院職員とも協議した上で今後の展開を検討する予定である。なお、このような活動については、引き続き部会の中で報告を行いたいと考えている。

部会長) 次年度も、地域移行グループの名称のまま活動していくことに異議はないか。

—出席した全委員とも異議なし—

部会長) 次年度の協議テーマ等について、各委員から意見をもらいたい。

A委員) 地域生活支援拠点の詳細が今一つわからない。部会の協議テーマにすることで、各機関がどのような役割を担うことができるかを考えつつ、理解を深めることができるのではないかな。

市) 地域生活支援拠点については、前回の全体会で一般的な考え方の説明を行った。3月開催予定の全体会でも、改めて拠点とは何か、宝塚市における拠点整備の構想について報告を行う予定である。とは言え、全体会で報告したからと言って、全ての市民に伝わったとは思っていない。宝塚市における拠点は、委託相談の地区分担が核になると考えている。より地域を意識した相談体制を展開し、支援のネットワークを強化することを目標としている。

A委員) 周知のことを言っているのではない。地域移行Grとして、それぞれがどのような役割を担えるのか協議し、それをフィードバックしてはどうかと考えた。地域としての役割の確認、地域の力の掘り起こし等ができればと思う。

部会長) 地域生活支援拠点はまだ新しい考え方である。部会での協議に乗せることで、拠点整備に良い影響を与えられることもあるかもしれない。

B委員) 地域生活支援拠点は、基幹相談支援センターに匹敵するくらい中身のあるものになってほしい。「ここに行けば安心」と思えるようなものが望ましい。家族会でも安心できる居場所、夕方からの時間を過ごせる場所の必要性等を訴えてきた。拠点がその役割を担ってくれることを望む。

C委員) ここ数年部会に参加する中で、精神科病院の現状を知ってもらうため、ありのままの姿を伝えてきたつもりでいる。これからも、部会に参加することで宝塚市のことをより理解していければと思う。

部会長) 地域生活支援拠点と精神科病院の連携の在り方について検討してもよいかもしれない。

D委員) 宝塚保健所は三田市と宝塚市を管轄している。今年度については、宝塚市及び三田市で地域移行支援事業を行うことができる一般相談支援事業所に声をかけ、情報交換を行う場を持った。来週、三田市に所在

する精神科病院と連携を図るべく、交流の場を設ける予定としていたが、新型コロナウイルス蔓延の影響もあり、現時点で実行するかは微妙な状況である。

部会長) 市ではなく、保健所主導の動きなのか。

D 委員) 地域移行支援事業は、入退院を繰り返す人や、措置入院の人も利用の対象となった。措置入院のケースで保健所と相談支援事業所と一緒に動いたケースもある。地域移行のことがよくわからないという事業所が多いため、この会を通して制度について理解を深め、地域移行支援事業の活用促進に繋がればという思いで集まりの場を設けた。

E 委員) 地域生活支援拠点は、構想図(定例会で配布した「宝塚市における地域生活支援拠点(案)」)を見ると「このとおりになってほしい」と思うが、この体制を実現できるだけのコーディネーターやスタッフがいるのかと不安になる。また、拠点はどれくらいの権限を持つのか、どれくらいの予算が付くのか等の不安要素もある。

部会長) 地域の点と点をどのように繋いでいくのかが重要であろうが、市として何か考えはあるのか。

市) コーディネート力が大事であると考えている。その為にも、市内7地区を分担する委託相談支援事業所にしっかり地域を見てもらいたいと考えている。

部会長) 面的整備が歪な形にならぬよう、均していくことが必要だろう。機関同士の情報共有が尚更大切になってくる。

部会長) 改めて今までの流れを振り返ると、まずは任意入院患者が退院できない理由を探るべく、意識調査のためのアンケートを実施した。しかし、「退院したい」と回答した数がかなり少なかったことを受け、病院職員を部会に招き、精神科病院の実状を聞き取ろうという方針を決めた。しかし、病院職員にも受け入れ側である地域の体制を説明できるよう、まずは地域の課題整理のための協議を行った。そこから、地域移行支援事業の活用促進が主なテーマとなり、声を挙げやすい仕組みを作るべく話し合いを重ねた。大事なことは「地域で生活したい」と思ってもらえることであろうと感じている。アンケート調査を行ったが、果たしてこの結果が対象者の本意を反映しているのか疑問を感じている部分もある。「本心を書いていいのか」と感じた人もいるかもしれない。アンケート自体にバイアスがかかっていたかもしれない。改めて、入院している人、入所している人と直接コミュニケーションを図る必要があるのではないかと感じている。そのような声を吸い上げられる環境を整えば、地域生活支援拠点にも繋がるのではないかと。今まで部会の活動にあたり、多分にB病院の協力を求めたが、これからも力を借りることは可能だろうか。

C 委員) 引き続き協力する。今年度は精神保健福祉センターから声がかかり、630 調査に基づいて1年を通して指導・助言をもらうこととなった。病院職員は看護師が大半を占めており、630 調査をもとに講義やグループワークを通し、自身が働いている病院の入院形態の割合等を知り、どのような取り組みができるのかを考え、何のために看護を行っているのか等、それぞれが理解を深められる取り組みとなった。この取り組みの中でケースとして取り上げた患者に宝塚市民はいなかったが、部会での議論の材料にできる余地はあると感じている。

委員から挙げた意見を参考にしつつ、事務局で整理を行い、次年度の方向性を決めていくこととする。

3. その他

・宝塚市自立支援協議会 全体会 3月25日(水) 13:30~16:30 実施予定。

各専門部会からの報告と意見交換がメイン。地域生活支援拠点の整備について市から説明を行う予定とな

っている。